

「自殺を図る人に支援を」 ERと県が協同事業

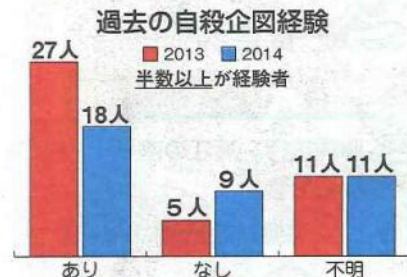
青森・健生病院

自殺未遂で搬送されてくる患者にもつ
と関われないか。青森県弘前市にある
健生病院のER集団がこんなことを考え
ました。未遂患者を記録し分析すると、
過去に自殺を図っていた人が50%を超
え、生活苦や疾病、複雑な家族関係な
どの背景も共通していました。この報告
を目にした青森県が、同院に協力を要請。
自殺未遂者支援のモデル事業が始まっ
ています。(木下直子記者)



ERの太田科長、葛西主任、坂田清香看護長

健生病院が年間受けている救急搬送者約一八〇〇人中、自殺未遂者は四〇〇五〇人。こうした人を精神科医につなぐなど意識的な支援を行ってきたが、居合わせぬ職員で対応が違ふという課題が。そこで五年前、当時の看護長が「再自殺企図患者リスク評価シート」を作り使うことにしました。過去に自殺を図った経験、死ぬ理由、まだ死にたいか、などの設問を、患者が会話可能な程度になれば、確認します。「まだ死にたい」人や「幻覚」「幻聴」など、リスクの高い項目は太字にし、太字該当が三つ以上の患者は、医師・看護師で治療方針を考えます。



ハートケアのカンファレンス

「記録で未遂者の傾向つかむ
こうして対応を統一したこと
で、自殺未遂者の傾向が見えてき
ました(図)。」

「家族背景や生育歴に課題を抱
えている」と、同院地域連携室の
工藤聡子主任。生活困窮や孤立、
家族関係など生活背景が原因で自
殺を図ったと思われる人が来れ
ば、工藤さんが呼ばれます。

評価シートの綴りをめぐるこ
ろ、厳しい境遇に思い詰めた人たちの
姿が。我が子のジャンクルジムで
縊死しようとした三〇代男性は病
気休職中でした。包丁で腹を刺し

た四〇代男性は、持病の悪化を理
由に給与を正社員からパート並み
に落とされ、乳児を抱え困窮して
いました。親子二人で母親の年金
で暮らしていたがその親が死に、
故人の残業を大量に飲んだ人も。

「苦勞を思うと、ため息でる患
者さんはっかりだ」と、ERの科
長・太田正文医師。忙しい中でも
ERがこの問題にとりくむ理由を
聞く。と、「私たちがやらなきゃ、
どうする。」と、声が揃いまし
た。なぜ救急搬送されたのか、患
者さんの社会背景を意識してい
るからこの姿勢です。

青森県は二〇一五年一〇月から

＊ ＊



全戸訪問で声かけ

【青森発】健生病院では一二月
一四日からの五日間、在宅支援セ
ンターの提起で、近隣地域の全戸

訪問を行いました(写真)。春に
同様の訪問をしています。その
地域で手遅れ死亡事例が出たた
め、地域を変えて訪問すること
に。当事業所の社保委員会でも、
困難な世帯の把握や適切な支援が
重要と確認し、一人が参加。
後日、参加者の報告をまとめ、
情勢学習の場にして報告会を開き
ました。「お金がなく一日一食で
過ごしていたり、薬を半分ずつ飲
んでいる人がいた」、「高齢独居の
人が緊急時の不安を持っていた」
などの実態がきました。また、支
援体制の土台作りや、支援の継続
が必要だと課題も挙がり、今後も
いのちをまもる活動を続けようと
意思統一しました。

(兵藤尚子、事務)

自殺未遂者を支援するモデル事業
「ハートケア」を、健生病院をモ
デル病院に始めました。ERの医
師などが支援が必要と判断した自
殺未遂者を、公的機関が連携し再
企図を防止するしくみ。家族も対
象です。これまでに、精神科や支援
機関につながっていない患者の特
に有効だと病院は見えています。

ERの葛西美香子主任(看護)
が、評価シートからまとめた自殺
未遂者の傾向と複数の専門機関の
支援の必要がある、と地域の救急
医療の研究会で報告したことが注
目されました。弘前保健所も消防
署の協力による過去二度の調査で
自殺者は減ったのに、未遂者が減
っていない実態を把握していまし
た。救急医療機関の未遂者の支援
にも課題がありました。

「健生病院に搬送されてくる人
に合わせて、途中で対象地域も拡
大しました」と、弘前保健所の三
上のり子課長。「熱心な健生病院
なしに、できませんでした。モデ
ル事業は今年度いっぱいですが、
支援は継続します。支援機関の連
携で相乗効果生まれれば。」